

二〇二二年八月六日

祈りこめ平和宣言蝉時雨
もてなしの麦茶一杯一気飲み
語り部は若き少女や原爆忌
出払ひし看護詰所や夜の秋
吊革の手に老いをみる晩夏かな
言ひ過ぎた言葉戻らず遠花火
石磴の手摺に残る暑さかな
日盛りに影かぎろひて飛機離陸

二〇二二年八月五日

切っ先に朝露ひかる稲の青
鮎飯の香に咽せながらしゃもじ切る
朝戸繰る否やにわつと蝉の声
陋屋の格子に咲かす牽牛花

二〇二二年八月四日

休耕田隈なく埋む泡立草
傷心のごとうなだれて炎暑往く
草刈つて匂ひたちたる休耕田
帰省子の恋持て帰る夕かな
満天の星屑うかべ夜のプール
水打って恙なき日を謝す夕べ
一病の夫の味方は冷奴

二〇二二年八月三日

父はさみ姉妹の会話団扇風
西瓜玉はばきかせをる野菜室

こすもす 豊実 満天 むべ 凡士 明日香 ほんこ 素秀 素秀 やよい 素秀 やよい ぼんこ ぼんこ みきお たか子 やよい 素秀 凡士 満天 もとこ なつき あひる

小さき背に担ぐ大きな捕虫網

新涼や街の運河の水匂ふ
袈裟斬りに甲板掠め夏燕
モール街歩き疲れて氷菓食ぶ
屏疊岩連ねし峡の風涼し

二〇二二年八月二日

巻貝の虚ろな殻に忘れ汐
駆け回る三角ベース夏の草
救急のサイレン止みて蝉時雨
蝉時雨切り裂くゴルフショットかな
打水や京古町の石畳

二〇二二年八月一日

日照雨きてついと止みたる蝉時雨
風鈴の舌垂れてゐる午後六時
父母祖母と偲ぶ生家の端居かな
勝ちし子の二の腕太き宮相撲

二〇二二年七月三十一日

水甕を壺中天とすめだかかな
法話聞く皆に首振る扇風機
蝦夷ここに棄農の地あり夏の草

豊実 たか子 素秀 あひる 菜々 素秀 凡士 せいじ はく子 たか子 凡士 もとこ 宏虎 たか子 なつき むべ

毎日句会みのる選・二〇二二年八月八日